

みなさまのご寄付が支援となって、コロナ禍のアーティストたちに届いています。

2021年度助成活動報告

一般助成
舞台芸術

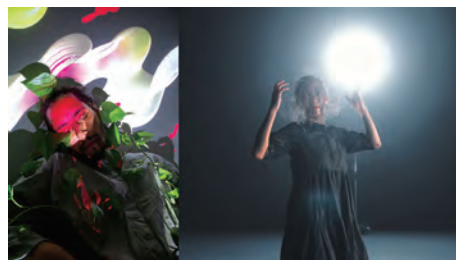
曾根 知さん コンテンポラリーダンス公演「No Man's Land」

コンテンポラリーダンサーの曾根知さんのダンス公演「No Man's Land」が、10月3日にロームシアター京都ノースホールで開催されました。

もともとクラシックバレエのダンサーであった曾根さんは、2008年にイスラエルに渡ってコンテンポラリーダンスの活動を本格化させ、現在、京都とイスラエルを拠点として精力的に活動しています。

今回の公演では3作品が上演されました。「Written in the dressing room」はコロナ禍の中で生まれた作品で、これをソロで踊った曾根さんは、何かに翻弄されるように、しなだれ、うつぶし、飛び跳ねる、といった身体の動きを見せます。曾根さんによれば、この作品は、ダンサーへ向けられる期待の表現であると同時に、幸せに生きる方法の提

案でもあり、「私は他人のためではなく、踊りたいから踊る」と述べる曾根さんの踊りから、束縛からの自由を求める強い想いのようなものが読み取れました。この作品自体がコロナ禍におけるアーティストのステートメントのように感じられた公演でした。



公演風景 ロームシアター京都(京都市)

岩井コスモ証券
ASK支援寄金助成 美術

田中 秀介さん 個展「馴れ初め丁場」

現代美術家の田中秀介さんの個展「馴れ初め丁場」が、京都府南丹市の八木町にあるかつての酒蔵・旧八木酒造跡地にできた現代アートのためのスペース、オーエヤマ・アートサイトで10月9日～18日にかけて開催されました。日本酒を仕込むための道具がそのまま残された空間のいたるところに、田中さんの絵画20点が展示されました。

田中さんは、和歌山県生まれの35歳で、現代の日常を独自の感性でとらえた絵画で注目されています。一昨年は生まれ故郷にある和歌山県立美術館で個展を開催しました。

展示の構成を考えると、酒蔵の趣をできるだけ活かし、来訪者が建物から懐かしさや美しさを感じ取りながら、作品が描く非日常的な風景にゆるやかに触れていくような展示を試みたそうです。会場には、新たに制作された輪郭が不定形のいわゆるシェイプドキャンバスの作品と、

会場の雰囲気に合わせて過去のものから選んだ作品が展示されており、あるものは風景に溶け込み、またあるものは際立って見えるような、メリハリが感じられました。

古い日本映画を見ているような昭和初期の空気が漂う空間において、古い建物と作品が響き合い、絵画に込められたアートの様相がより際立って見える展示会でした。



展示風景 オーエヤマ・アートサイト(南丹市)

一般助成
美術

小出 麻代さん 個展「月に、日に」

現代美術アーティストの小出さんの個展「月に、日に」が、10月9日～10月31日にかけて京都のギャラリーVOU/棒で開催されました。小出さんは、1983年大阪市生まれで、場所そのものや、そこに関わりを持つ人とのやり取りを起点に、「記憶」や「時間」にまつわるインスタレーション作品などを手掛けています。

今回の個展「月に、日に」は、明治時代に発行された「古歴」とのめぐり逢いから、暦にかかわる月と日、光と影、そして長い時間を越えて続く人の営みといったさまざまな事物からイメージを生み出し、それらを空間全体をつかったインスタレーション作品として構成しました。メインの空間には、女性たちが黙々と手を動かしながら制作するキルティングに着想を得た大きな紙によるコラージュ作品が天井から吊り下げられ、そこに手作業をする女性のシルエット

が映し出されています。その手前には、あたかも循環しながら着実に時間を前に進める「暦」の存在を思わせるかのように、乳白色のガラスボールの底に置かれた古暦を、天井から吊り下げられた石が振り子のようにたどっていくイメージが示されています。観念的な展示でありながらも、白く大きな紙のコラージュにあしらわれたパターンの美しさや、石がガラスにあたる軽やかな音が心地良く感じられる展示会でした。



展示風景 ギャラリーVOU/棒(京都市)

岩井コスモ証券
ASK支援寄金助成 音楽

いぬい まさかず 乾将万さん「バレエで音楽を描く— 継往開来」

ピアニストの乾将万さんが2年越しで企画したコンサート「バレエで音楽を描く— 継往開来」が、11月3日に兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールで開催されました。

乾さんは、茨木市生まれの31歳で、ハンガリー政府給付奨学生としてハンガリー国立リスト音楽院に学び、現在は茨木市を拠点に、自身の演奏活動をはじめ様々な演奏会の企画をするなど幅広く活躍しています。

このコンサートは、単に音楽に合わせてバレエを踊るのではなく、音楽が描き出す「何か」をダンサーがとらえて身体で表現することを試みる取り組みとして行われました。前半の『オンディーヌ』は、本公演のために書き下ろされた作品で、美しい水の精霊の物語を音楽と踊りが描き出します。一方、後半のストラヴィンスキーの『春の祭典』は、終始、前衛的で抽象的なイメージが前面に表現された作品で、随所に、身体的な動きによる音楽の可視化を思わせる

場面が見て取れました。

リハーサルは、2019年12月から始まり、コロナで本番が延期されたこともあって、重ねたリハーサルは100回近くに及んだそうです。タイトルにある「継往開来」とは、先人の文化を継承し未来を開くという力強い意味が込められた言葉で、乾さんをはじめ関わった若い方々の今後の活躍が大いに期待できる舞台でした。



公演風景 兵庫県立芸術文化センター(西宮市)

岩井コスモ証券
ASK支援寄金助成 音楽

ほりえ まきお 堀江 牧生さん「デビューCD制作・収録記念演奏会 第1回～第3回」

チェロ奏者の堀江牧生さんは、1990年吹田市生まれの32歳で、モスクワ音楽院に学び、同音楽院を首席で卒業後、ロシア国立ボリショイ劇場管弦楽団で活躍した実力の持ち主です。今回初めてCDを制作することとなり、モスクワ音楽院時代の仲間である3人のピアニストを招いて収録が行われ、その成果を3回にわたりグランフロント大阪の島村楽器の演奏会場にて演奏会形式で披露しました。

6月29日に行われた第1回には、第77回日本音楽コンクールで優勝した入江一雄さんが登場。ベートーヴェンのチェロ・ソナタ第5番を中心としたプログラムを演奏しました。9月20日の第2回には、沼沢淑音さんを招いてグリーグのチェロ・ソナタを中心としたプログラムを演奏。沼沢さんは桐朋学園を経て、モスクワ音楽院を卒業後、国際的に活躍されています。11月15日の第3回は、第76回日本

音楽コンクール優勝者の佐藤彦大さんひろおを招いて行われ、プーランクのチェロ・ソナタなどを披露しました。

いずれの回も小規模ながら国内最高レベルとも言うべき圧倒的な水準の演奏を聴かせるものとなり、彼ら若い演奏家たちのさらなる飛躍を大いに感じさせられました。



演奏会風景 島村楽器ピアノルーム(大阪市)

岩井コスモ証券
ASK支援寄金助成 美術

つみ たくや 堤拓也さん「余の光／Light of My World」展

若手注目のキュレーター・堤拓也さんが企画した展覧会「余の光／Light of My World」が、福知山駅前のかつてパチンコ店だったビルにて10月8日～11月7日の会期で開催され、19名のアーティストによる絵画や写真、映像などの作品が展示されました。

タイトルにある「余の光」は、聖書の一節からとられたもので、アーティストとは、自らの行いで世を光で照らし出す存在であるというイメージをもとに、人はなぜ芸術を必要とするのかという問いを私たちに投げかけます。

貧しい人々の手によって解体される巨大タンカーの姿をとらえた映像作品から、廃船となったタンカーの物悲しい独白の声が空間に響き、無人のパチンコ台の列に設えられた移動式祭壇の作品が、祈りの主の不在を示すかのように暗闇に浮かび上がります。

とりあげられたアーティストたちは、現代美術ではなじ

みのない国の出身者や、退職後に画家に転向した方、年齢が若いために知られていない方などで、人々の目に触れる機会が限られてきた方々の作品が多く含まれていました。こうした方たちが、アーティストとしての使命を寡黙に果たしていく姿を通して、あらためて芸術の持つ意味について考える機会となりました。



展覧会風景 旧銀鈴ビル(福知山市)